



学生が選ぶ インターンシップアワード 大賞は富士通に決定!

5月14日、日経ホール(東京・大手町)で、「インターンシップカンファレンス」が初開催され、「学生が選ぶインターンシップアワード」の表彰式が行われた。インターンシップは学生の社会的・職業的自立に寄与する効果があるが、受け入れ企業の負担も大きく、実施率は37.6%(2017年度)に留まる。学生の職業観を養う魅力的なインターンシッププログラムの表彰を通じ、改めてその意義が社会で共有され、実施企業が増えることが期待される。



全247社・297プログラムの中から厳正な審査により、富士通が大賞に選ばれた

大賞

富士通(本店/神奈川県、本社事務所/東京都)

自己研さんに生きる就業体験を幅広く提供

個人の人々の経験値は社会とつながることで、どう生かすことができるのか。学生が就業体験から得た気づきを持ち帰ることで、さらに学びを深化させるという好循環を期待し、我が社はインターンシップを継続的に進めている。最大の目的は、自己成長のきっかけとして役立ててもらいたい。多くの学生に門戸を開くため、全国各地、約120の職場で、150以上のテーマのプログラムを実施。インフラだけでなく、アウトプットの機会も設けている。企業としてより高い人材育成効果を狙えるだけでなく、学生にとっても、より実践的な就業体験となるよう自負している。学生全員にメンターを配置し、日ごとのPDCAだけでなく、プログラム全体でのPDCAも回し、気づきの機会も数多く提供。今後もインターンシップの質をさらに高めていく。



人事本部 人材採用センター長 佐藤 渉氏

最先端ソリューションや技術に触れることができるだけでなく、約120の職場でインターンシップ生を受け入れ、学生に対する多彩な機会を創出。また、インターンシップ生全員にメンターを配置するなど、高い達成意欲や継続的な学びを促すプログラム設計に工夫が凝らされている。一段高いレベルの課題を提示し、学習効果の最大化を追求したプログラムが高く評価され、大賞に輝いた。

学び続ける姿勢が働く人の可能性広げる

経済産業省 経済産業政策局 産業人材政策室 参事官 伊藤 禎則氏

人口動態の変化やテクノロジーの進化など社会の構造転換が起こる中で、働き方も多様化しつつある。一方で私たちは、絶えず学び続ける責任も負う。学習に限りなく、生涯にわたる学びと労働を繰り返すリカレント教育の重要性が、全世界で共有されている。学びによって得た高い専門知識やスキル、人脈は、個々の働き方の可能性をさらに大きく広げられる。一つの会社に定年まで勤め上げれば「上がり」という昭和の人生と異なり、キャリア観から脱却する時代。生涯学び続ける機会をいかに創出するか。経済産業省としても、全力を挙げて支援したい。働くことが学ぶことの結節点であるインターンシップはまさに、時流に沿った取り組みだ。ますますその発展を期待している。



魅力的なプログラムのカギは「自己成長」

法政大学 キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修氏

今回の「インターンシップアワード」では、独自の効果測定尺度を用いて審査した。重視したのは、学生の就業意識を高め、自己の成長につなげていくプログラムであるかどうかだ。今回の受賞企業のラインナップをみると、学生たちが「インターンシップを通して自己成長」を重視しているのは明らかだ。働くことが、いかに自分を成長させてくれるのか。学生は、それを体感してみたいと願っている。その思いに応えるのはどんなインターンシップか。今回の受賞企業のプログラムはその好例となる。見逃せないのは、3つの共通点だ。



1. インターンシップを「採用活動を補完するもの」と位置付ける企業は少なくない。学生の中には「インターンシップは就職活動に有利に進めるための一環」と捉える風潮がある。こうした背景から従来のインターンシップは、採用に直結するかどうかで評価されてきた。次に、未知への挑戦を促すチャレンジングな課題。例えば海外でのインターンシップへ飛び込むのを後押しするきっかけとなること。3つ目は、社会への視点だ。自社完結だけでなく、地域課題に紐づけて企業活動を考えられるようなインターンシップには、未来を開くアイデアを生み出す可能性が感じられる。

優秀賞

栄水化学(本社/兵庫県)

地域と連携し「おそうじ塾」運営に挑戦

まちの課題を解決するプログラムに地域と連携を取り組んで3年目。自社の清掃サービスの価値を生かし、自立した子どもの育成と習慣づくりを目的とした体験活動「エコビカはかせのおそうじ塾」の企画運営をインターンシップとして実施。地元尼崎市や市内小学校と連携し、出前授業や、自社に子どもたちを呼んでの授業の運営などを任せている。半年間の継続的なプロジェクトは、学生をお客さん扱いせず、責任ある仕事を任せ、自主性を重んじる。中小企業の強みを生かした、きめ細かいフィードバックも特長だ。



代表取締役社長 松本 久晃氏

事業に即したインターンシップの体験を通じ、単に会社・業務についての理解を深めるに留まらず、自治体と連携し、社会課題への取り組みと合わせて実施することで一層の理解促進を助長するプログラムである点が高く評価された。

クラウン・パッケージ(本社/愛知県)

食品トレーの企画から販売までを実践

我が社のインターンシップでは、リアルな仕事体験を提供。学生は、大学の学園祭で使用する食品トレーの企画提案・製造・販売に取り組み、売り上げ目標は1000万円。2カ月間、計7回のプログラムで。期間中、学生はグループごとにアイデアを持ち寄り、コミュニケーションをとりながらユニバーサルデザインを追求する。仲間と課題を共有し、研究・改善しながら企画を磨き上げるプロセスが実践的な仕事体験として評価され、嬉しく思う。一人ひとりに手紙を書くなど、フィードバックの充実にも注力している。



企画人事部 部長 片桐 登喜夫氏

実務体験が難しい営業系職種ながら、大学の模擬店で使用する食品トレーをインターン生がゼロから企画・製造・販売するという他社にない実践的な体験が提供されている点や、個人への手厚いフィードバックが高く評価された。

ポッシュ(本社/東京都)

グローバル企業で働く喜びを体感

我が社のインターンシップの対象は理系学生。国内での事前研修を経てベトナムへ渡航し、現地スタッフと英語でコミュニケーションをとりながらエンジニア業務を体験する。エンジニアの業務内容や求められる人物像はもとより、グローバル企業で働くことの難しさや喜びを、体感しながら学ぶためのプログラムだ。最終日には、現地のトップマネジメントの前で英語での成果発表を行う。今後も海外で活躍したいと願う学生の背中を押すため、グローバル人材の育成という観点から、インターンシップを継続したい。



人事部門 シェアードサービス部 採用・人材マーケティンググループ マネージャー 山市 千奈美氏

グローバル企業の強みを生かし、ベトナムの自社拠点で実際のプログラミングを体験させ、現地の従業員と関わる機会を提供した点や、現地スタッフからの手厚いフォロー体制など、独自の高い締密なプログラム設計が高く評価された。

三井住友海上火災保険(本社/東京都)

段階ごとに実践度増す綿密なプログラム

学生の意思や学習日程への配慮から、参加日程を自身で選択できる点や、最大15日間のプログラムを通して多岐にわたる学びが提供されている点、全社員の1割が協力している点などが高く評価された。全国7都市で1430人の社員を動員するインターンシッププログラム「MSICOLLEGE」を実施。期間は最大15日間。段階ごとに課題が深化する設計だ。必須参加の最初の5日間は主にグループワークを行い、損害保険会社の業務をリアルに体感できる課題解決型プログラム等を提供。任意参加のプログラムでは、より実践的な職場体験ができる。最終段階ではビジネスコンテストを実施。与えられた課題の解決にチームで取り組む。ここではあえて「正解」のない課題を設定。限界を超えて考え抜く体験から、学びや気づきを得てほしい。



人事部 副部長 兼 採用チーム長 宇都宮 重忠氏

学生の意思や学習日程への配慮から、参加日程を自身で選択できる点や、最大15日間のプログラムを通して多岐にわたる学びが提供されている点、全社員の1割が協力している点などが高く評価された。

パネルディスカッション

より高度で実践的な現場体験に高い期待

パネルディスカッションでは、審査にも参加した4人の学生が登場。活発な意見を交わした。インターンシップにおいて重視するものとして、全員が声をそろえたのがフィードバックの充実度だ。具体的には、「大学で学んでいることが、実社会でどのように生きるのか。社会からフィードバックは大きな気づきにつながる」といったコメントがあった。併せて指摘されたのが、密度の高い現場体験の重要性だ。現場の空気を肌で感じながら、より実践に近い仕事に挑戦したいと考える学生は多いようだ。「多少厳しめでも、現時点の自分の力を試せるような内容の濃いインターンシップに参加したい。それによって働くことの具体的なイメージが付き、自分のキャリア観の形成にも好影響をもたらすはずだ」との意見が出た。

企業への要望としては、募集人員の増加や応募条件の緩和など、インターンシップの機会増加を求める声が多かった。

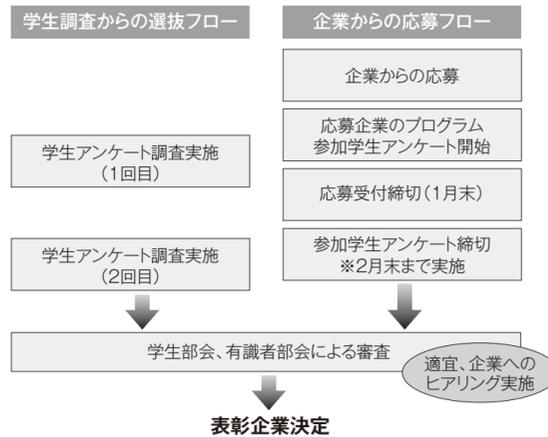
審査にも参加した4人の学生が登場。活発な意見を交わした。インターンシップにおいて重視するものとして、全員が声をそろえたのがフィードバックの充実度だ。具体的には、「大学で学んでいることが、実社会でどのように生きるのか。社会からフィードバックは大きな気づきにつながる」といったコメントがあった。併せて指摘されたのが、密度の高い現場体験の重要性だ。現場の空気を肌で感じながら、より実践に近い仕事に挑戦したいと考える学生は多いようだ。「多少厳しめでも、現時点の自分の力を試せるような内容の濃いインターンシップに参加したい。それによって働くことの具体的なイメージが付き、自分のキャリア観の形成にも好影響をもたらすはずだ」との意見が出た。

「学生が選ぶインターンシップアワード」とは

学生の社会的・職業的自立に寄与する機会創出の需要が増す中、インターンシップの役割が改めて注目されている。「学生が選ぶインターンシップアワード」は、インターンシップについて考える機会を広く社会に提供するため、学生の職業観養成に効果の高いインターンシッププログラムを表彰・周知する取り組みだ。

「インターンシップアワード」選考までの流れ

応募企業のインターンシップに参加した学生に、事務局が用意した評価アンケートの回答を依頼。アンケート結果等を踏まえ「学生部会」(インターンシップ参加経験のある学生からなる)が評価。適宜企業へのヒアリングを実施しながら「有識者部会」(キャリア教育の専門家からなる)が総合評価を行う。これら3段階の評価を総合し、優秀賞などを決定。インターンシップの趣旨を良く理解した上で、学生へのキャリア教育の機会を総合的かつ網羅的に提供し、学生からの支持が高く、その成果が顕著に認められる企業・団体を大賞とする。



【入賞企業】 エス・ピー・シー、応用社会心理学研究所、鈴与商事、ソニー、凸版印刷、トヨタカローラ山形、トラスコ中山、トレンド・プロ、三井住友銀行 (50音順)

主催: 「学生が選ぶインターンシップアワード」実行委員会 後援: 経済産業省/厚生労働省/文部科学省/日本経済団体連合会/日本経済新聞社/マイナビ

企画・制作 | 日本経済新聞社 クロスメディア営業局